

佳作

## バス停での出来事

岐阜県 帝京大学可児小学校四年 加藤 煌士

ぼくは、ゴールデンウィークに家族と広島へ旅行に行った。そのときのバス停での出来事が今も心に残っている。

原爆ドーム前のバス停からホテルへ行くためにバスを待っていた。ぼくの乗るバスが来るまではそれほど待たなくてはよかったけれど、旅行のつかれで、ぼくは早くバスに乗って座りたいという気持ちがあった。

バスが来ると、なぜかバス停を大きく通り越してバスが停まった。もっとバス停の近くに停めてくれればいいのに……と思いつつ、あわてて入口に向かって走って乗り込んだ。

すると、バスの中には、車いすに乗っている方がいた。その後ろの座席に座った。ぼくにとって車いすの方と一緒にバスに乗ったのは初めてだったと

思う。

やがて、運転手さんが出口にまわり、車いすの方を降ろす準備をはじめた。まず、運転手さんは、車いすを留めているベルトをいくつか外していった。

つぎに、出口近くのゆかからスロープを引き出し、車いすをしっかりと支えながらスロープを使ってゆっくりと降ろした。車いすの方を降ろし終わると、最後に、スロープをしまつて、ベルトを片づけ、おりたんであった座席を元にもどした。

ぼくは、その様子をじっと見つめていろいろなことを考えていた。さっきバス停を大きく通り過ぎて停まったわけにもそのとき気が付いた。運転手さんは車いすの方が降りるのに時間がかかることや次のバスが来たときのことなどを考えて、みんなのじやまにならないように、わざとバス停からはなれた広い場所へバスを停めたんだなと思った。もしかしたら、車いすの方が降りてからのことも考えていたのかもしれない。ぼくがバスに乗るときに、バス停の近くに停まらなかったことを変だなと思ってしまったことを少し後悔した。

バスが発車するとき、ぼくはバスを降りた車いすの方を見ていた。車いすの方は、バスを降りてもす

ぐに動き出そうとはしなかった。バスを見送るみたいにバス停でこちらを見ていた。運転手さんや時間がかかっても待っていた乗客に、感謝の気持ちを伝えていくようにぼくは思えた。運転手さん、車いすの方、バスの乗客が、それぞれのさりげない思いやりの気持ちで行動していたことも、この出来事がぼくの心の中にずっと残っている理由なのかもしれない。

ぼくは学校でバリアフリーやユニバーサルデザインについて学んだ。この出来事を実際に体験して、今の日本には、公共施設の多くにバリアフリーの設備が準備されて、利用されていて、それが当たり前になってきているということを実感でき、うれしかった。

障がいを抱えていても、もっと自由に行きたいところへ出かけることができるように、もっと変わっていったらいいと思う。そしてこれからもみんなが温かく支えたり、見守ったりできる社会であってほしい。ぼくもそんな社会をつくらせていきたい。